

筆者は開発経済学を専門としていた。開発経済学とは、貧しい国はなぜ貧しいのか、どうすれば貧しい国が豊かになるのか、ということを経済学の視点から考える学問である。貧しい国が豊かになるためには、安定した雇用の創出が必要不可欠となる。世界銀行のことも重要な刊行物である世界開発報告の2013年版は主題が「仕事」とされ、途上国を含む世界の持続的な発展のためには、雇用の創出が重要であるという点が強調された。

ではどうすれば途上国に

アフリカの仕立屋とカイゼン

の中小零細企業が存在していることをふまえると、外資の誘致とともに、現地のこうした企業を発展させていくことが鍵となることは言うまでもない。とりわけ、仕立屋に代表される縫製産業は、労働者を多く雇う労働集約的な産業であるため、その発展により雇用を生み出す可能性を秘めている。実際に、バングラデシュは、縫製業の成長とそれに伴う輸出の拡大によって、多くの雇用を生みだして急速な経済成長を遂げた。

しかしながら、途上国の中小零細企業を訪れてみると、あまりにも経営がなっていないことに驚く。きちんとした会計を行っている企業は稀で、帳簿すらつけていない企業も多い。作業

実験を行った。カイゼン経営研修の効果を測定するため、研修を提供するグループとそうでないグループとを無作為に分けるといって、実験的な手法（ランダム化比較対照実験）を用いた。この方法は、臨床医学における治験の考え方に基づいており、研修を受けたグループの仕立屋（処置群）と受けていないグループ（対照群）を比較する形で、研修の効果を測ることが可能となる。

社会実験の結果、処置群の仕立屋においては、カイゼンが導入されたことで作業場内や倉庫が整理整頓され、作業効率が向上して生産過程における無駄が減った。さらに、研修の3年後に追跡調査を行ったところ、

日本発の経営を 途上国の成長に

経営を学んだ経営者が設備投資やマーケティングを行うことで、売り上げの向上にもつながったことが発見された。

タンザニアにおいてカイゼン経営研修の効果が見られたという筆者の研究結果は、国際協力機構（JICA）がアフリカにおいてカイゼンを普及しようとしているという戦略を支持するものである。日本政府が各国首脳を招いてアフリカの経済成長を議論するアフリカ開発会議（TICAD）がこの8月にナイロビで開催されるが、その場において、日本発のカイゼン式経営をアフリカに普及するという戦略は十分に発信していく価値があろう。

おいて安定した雇用を生み出すことができるのである。うか？一つは、海外直接投資による外資企業の誘致である。しかし、途上国には無数



名古屋市立大学大学院
経済学研究科講師

樋口 裕城

こうした途上国における企業の状況を改善すべく、筆者は東アフリカに位置するタンザニアにおいて、仕立屋の経営者にトヨタ式カイゼンを教えるという社会

ひぐち ゆうぎ 開発経済学。政策研究大学院大学、博士（開発経済学）。

